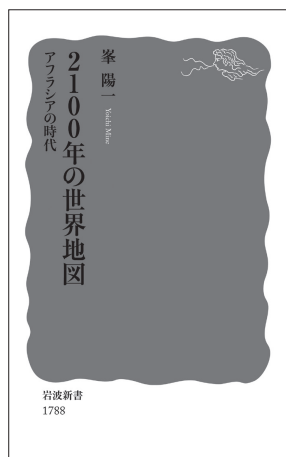


峯陽一 著

2100年の世界地図

——アフラシアの時代

紹介者 角田 展子



岩波書店

2019年8月

新書判

238ページ

本体960円

目次

はじめに

第1部 2100年の世界地図

第1章 22世紀に向かう人口変化

第2章 定常状態への軟着陸

第3章 新たな経済圏と水平移民

第2部 後にいる者が先になる

第4章 ユーラシアの接続性

第5章 大陸と海のフロンティア

第6章 2つのシナリオ

第3部 アフラシアの時代

第7章 汎地域主義の萌芽

第8章 イスラーム

第9章 「南」のコミュニケーション

終章 共同体を想像する

あとがき

参考文献

2100年の世界はどうなっているのだろうか。本書は国際連合経済社会局人口部のデータをもとに、地理情報システム(GIS)の手法を用いて作成された豊富な地図資料を駆使し、未来を予想し分析していく。今まで考えたことのなかった視点から世界地図を見直す体験の連続で大いに知的興奮を受ける。

本書の大きな特徴は、新書では珍しく地図資料の多くがカラー印刷であることだ。たとえば、2001年と2100年の世界の人口分布ツリーマップ。カラーで明示された2枚のツリーマップを見比べるだけで、2100年にはアフリカとアジア(本書ではアフリカとアジアを包含する地理的単位として「アフラシア」という用語を使用。アフリカを先にすることに留意)の人口が世界人口の8割(!)を占めることが視覚的に理解できる。とくにアフリカの人口増加が著しい。ただ、アフリカ人口も22世紀には落ち着き、世界人口は112億人程度で定常状態に入ることが期待されている。「無限の人口爆発で食糧危機がおきて人類滅亡」などという説を恐れる必要はなく、112億人を前提にした持続可能な共同体を構想しようというのが本書のメッセージである。

著者は、アジアとアフリカが、相互的な水平移民の増加も含め「ウィン・ウィン」の関係で協力しあう楽観的なシナリオを示す一方、アフラシア内部での分裂や、アジアとアフリカが支配—被支配関係におちいる可能性も示唆する。すでにその傾向を示すデータには事欠かない。これに対しては、アジアの大国(日本も含む)はアフリカの内発的な発展を側面から支援する構図を確立すべきと釘を指す。他方、アフリカの若者の健康と教育に十分投資することで、アフリカ社会が「蛙飛び」をおこす可能性にも言及する。まさに未来は未決定性に満ちている。

このほか、1955年のバンドン会議の再評価や、汎アジア主義、汎アフリカ主義の思想家の紹介にもページを割いている。未来を語る時、人類のこれまでの歴史をふまえるのは当然であろう。

読後感は爽やかであり、未来には持続可能なシナリオがあると、勇気づけられる。本書が描く世界は、現在の高校生が直面する世界でもある。教室で、本書の豊富なデータを用いて、アフラシアと日本の関係、日本が、自分が果たせる役割について議論する授業を展開できたら、それこそが「世界史探究」が学習の総まとめとして設定している「地球世界の課題の探究」そのものであろう。

(つのだ・ひろこ／東京都立青山高等学校指導教諭)